

『武功夜話』の文芸的研究(2)

——制作の方法——

松 浦 武

**A Literary Study of
Maeno Katsukane's "Buko-yawa"**

Takeshi MATSUURA

In Japan the first constitutional government modeled after that of China was established in the seventh century, and the writing system using Chinese characters was widespread among the court aristocrats. In this respect Japan was comparatively behind other nations in the history of the world. Once the Japanese had acquired the proper writing system, the creative writing of poetry with a marked individuality and other rich forms of self expression using prose such as stories, novels, diaries, essays, etc. flourished, which has continued through the twentieth century. In the history of world literature it is a distinctive phenomenon that a creative literature of expressing personal behavior and psychology flourished in the early stage of a nation's development.

In the Japanese history of literature, this personalism seems to have temporarily disappeared during the turbulent period which lasted from the fifteenth to the sixteenth century. However, *Buko-yawa* (The Night Tales of Military Exploits) published recently proves that the existence of this personalism is such a deeply rooted, long-continuing tradition of Japanese literature.

『武功夜話』の文芸的研究(2)

制作の方法 I

松浦 武

《それがし小き頃より一日といえども忘るべからざるなり。義は泰山より重きと心得候。(徳川家康)》(巻十五)

同じ戦記文学でも『武功夜話』が、『平家物語』や『太平記』に見られない重厚感や迫力を内包するゆえんの一つは、その制作方法に由来すると思われる。『武功夜話』の著者前野雄翟は、自家の武功を叙述するのに、きわめて独創的な制作方法の考案者でした。

たいてい、どの民族でも、そうだと思うのですが、一般に、文化が発達し知的伝統が集積するにつれて、一方でずるくなつてゆきます。権力者の権謀術数や策略にしても、皮肉ない方をすれば、次第に発達してゆきます。日本の十六世紀は、旧秩序が崩壊して、新しい権力と社会秩序が醸成されていった変革期です。日本全土を制覇して首領の座に上つた人物たちはもちろん、日本人の多くが、功名心や打算や忠誠心や自負や敵意や不安や恐怖にとらわれながら、大小権力の帰趨をめぐって、ふりまわされた時代です。そこでは多くの殺戮が行なわれ、大量の犠牲者が出ました。一介の牢人が、目を見るような出世をした半面、悲運に泣いた莫大な量の人間たちがいたはずで

十七世紀初頭になって新政権(徳川幕府)が樹立し、社会が一応の安定をみたとき、十六世紀社会における父祖の武功を、本格的に記述しようとした著者にとって、多くの困難が現前したと思います。父祖の武勇や合戦の記録を書いた人びとは、じつに沢山います。しかし今日残つて

いる、おびただしい数の戦国軍記が、概してつまらない理由の一つは、制作方法について無反省だからです。『武功夜話』の著者前野雄翟は、こういう人びとと違っていました。史実と思われていることも単純でなく、いわば〈裏がある〉ことを知っていました。〈真実〉に迫ることが容易でないことを知っていました。著者は、いわゆる〈事実〉といわれている奥に、〈真実〉を発見しようとして腐心したのです。

そこで著者は第一に、著作に必要な資料の収集に力をそそぎました。幸い祖父や父が、多くの記録を残していました。しかし、それだけで満足せず、他の文書や記録類、体験者の口語りや自己の体験をきょりよく収集、その相違を注意深く見きわめて、著作にあたっては、出所を明示しながら併存させ、安易な判断を避けたのです。判断を避けたばかりでなく、資料による〈おのれの認識〉をこえる世界を排除しました。〈形象化する世界〉に意識的に限界を設定したのです。自家の父祖に関する武功を中心に書くのですから、見栄や誇りや身びいきが、おのずから働きがちですが、著者はストイックに、こういう感情を抑制して、〈事実〉〈真実〉に執着しました。父祖の恥もまた〈事実〉であり〈真実〉であるかぎり、容赦なく叙述したのです。

第二に、可能なかぎり〈真実〉に迫るために、一つの事件、一つの事態をえがくの、資料の相違が究めがたいとき違いを併記しただけでなく、事件・事態にかかわった人物の過去を顧みたり、その後における彼の人生を援用したりしました。ある合戦、ある情勢に積極的に参加したり、まきこまれたりした人物の、それ以前における過去の生い立ち、それ以後に彼の辿った人生を、同時に見直すことで、〈真実〉に迫ろうとしたのです。私がこの拙論で考えようとしたのは、前野雄翟の、このような制作方法に関して論究することです。『武功夜話』は今日も生命をもつていて、単なる戦国回顧の物語ではないのです。

はじめに述べたように、『武功夜話』の傑作たる所以の一つは、一個の人物を認識するのに、当面の事件なり事態なりにおいてだけ、とらえないことです。『武功夜話』中に登場する人物たちに対する作者前野雄翟の認識は、『武功夜話』の執筆中、つねに彼らの生涯とその眷属に及んでいます。その認識を前提にしたうえで、その人物の長い生涯において当面する一事件、一事態が形象化されるので、主たる登場者たちは、一事件、一事態を形づくる一片の人物ではなく、他の箇所における他の事実、他の人物と密接にかかわりつづけて、作品が独特の〈奥行〉をもつことになるのです。

そういうヒーロー型人物は多々あるのですが、例えば、著者雄翟の父雄善の場合です。作者は冒頭いきなり次のように記しています。

《一、親助六尉（雄善）尾州清須御城退去候は、慶長寅の年（一六〇二）の夏越方の事、先年関ヶ原において先手押し懸り手負候鑓創りなかなかもつて癒申さず、為に相果て候なり。親父様（雄善）よくよく南窓庵によりて諸事書留め候帳、併家伝記、先祖系図書等の古証文の散逸をおそれ書き留め候ところ、慶長巳の年（一六〇五）業なかばにして相果て候なり。……一、親父様助六尉、存命なされ候頃は、常円殿、これは前野清助殿の事、同九郎兵衛殿、当屋敷角の南窓庵へ罷り参し、終日語り合ひ候。親類縁者あわせ地下の人々、そのほか知音の人々、旅の御方ども夜な夜な罷りあり、四方八方の旅話の御談義これあり、深更に及びし事も御座候へば、われ（雄翟）共も、その場に居合せ耳をかたむけ聞き居り候なり。前野清助殿、寿を重ね候も、なおもつて壮健たれば語り上手にあらせられ候。九郎兵衛も諸覚え堪能なる御仁

に候ゆえ、われも童どもも刻をうち忘れ聴入り候なり。御兩人は若年の頃より陣出入り、取合ひの一件一件を詳しく申し語り候。われも御袋様（雄善妻）も親父様（雄善）も御同座、諸国の陣の一党中の武刃の数々の振舞い等、しかじかあれよこれよとつきる事なく、面白可笑しき件、呵々大笑候えは、はたまた無念、痛恨遣る方なく、一同果然と泪を相催し候事、艱難辛苦よくぞ今日まで生きながらえ候は、誠に御目出度く候。》（巻一）

このように、まず戦国乱世を生きのびえた父や一族縁者の回顧のありさまを記しています。南窓庵というのは何か。《当（前野）屋敷末申の土居下に南窓庵と申し伝え候一庵御座候。この小庵は、先祖小次郎尉宗康（雄翟曾祖父）より寛永の今の世（一六三四ころ）なお存するなり。

……東照神君（徳川家康）天下を治め給うにより元和（一六一五—一六二四）以来、四海平穩、百姓安堵して荒蕪開耕、百姓の業熾なり。……憶えば天文・弘治（一五三二—一五五八）以来、我等党中の者、長鑓・孤剣に勇を競って咆哮するといえども功成り難く、これ弓箭の業やんぬる事に候哉。……》（巻一）という、前野本家伝来の庵です。この庵で往時を記録したり語ったりした父雄善は、《慶長壬寅の年（一六〇二）の事、親助六尉、ゆえあつて清須御城永の御暇、在所前野村南窓庵に塾居候。両三年存命の後、相果て候》（巻二）と、くりかえし父の終焉を語っています。『武功夜話』中の主要人物、数奇の人生をたどった雄善が、その晩年、彼の死から書き始められるのです。

さらに暫く進行すると、雄善は、前野家の系譜中の点景的一人物として表記されます。

《織田信長公の御知行の宛行状、今に所持仕る。前野孫九郎、後改め小坂孫九郎尉（雄吉、雄翟祖父）の事、小坂久藏・同源九郎亡き後、

信長公、小坂の家の断絶を惜しみ給い、孫九郎尉をして小坂の名跡を襲わしめ給うなり。……これは岩倉落去(信長が織田信安・信賢を亡ぼした事)の後、若君御茶筌様(信長二男信雄)の傅役を仰せ付けられ、仍て御台地三千貫文を御拝領、なお信雄公より雄の一字を頂戴仕り、……孫九郎尉の室は三輪氏、その子、助六尉(雄善)、孫八郎(雄長)、平之丞、仙十郎、由之助。女子二人あり、この女子は、尾州星崎の住人山口半左衛門重政の室と成る。又の一人は、鶴飼十兵衛の室と成る。(巻一)

といった叙述です。『武功夜話』は、前野家の古い歴史をちりばめながら、ほぼ一五五〇年から一六〇〇年代の初頭にいたる前野家中心の史実が、原則として時代順に叙述されるのですが、ここで、つまり巻一において、早くも雄善の生も死も記述され、作者雄翟の胸中では、数十年の歴史が、いわば自在に、過去現在を往来しているのです。

『武功夜話』によって雄善の人生をたどると、彼の人生も、多くの登場者たちとともに、文字どおり波瀾万丈、苦難のくりかえしでした。それを略記すると、まず織田信長の二男たる信雄の近習として出仕します。信雄は信長の死後、その後継者たりえず、尾張国を中心にして、約百万石の一大名に位置づけられます。父信長に比すれば、ひどい転落です。羽柴秀吉と柴田勝家が合戦に及んだとき、雄善は、秀吉方についた信雄傘下であって出陣奮闘、一年ののち、こんどは秀吉と信雄が対立する小牧・長久手の戦いには、信雄麾下で、伊勢峰城の防衛に父とともに出陣、敗退して命からがら逃げて帰る。帰るやいなや、木曾川河畔にある加賀の井城の加勢に出陣の命令をうけて籠城、これまた落城、やっと城を脱出して、辛うじて死をまぬがれたのです。そのあと蟹江合戦では、自分の妹の救済に苦勞します。信雄が秀吉と講和したあと、秀吉の越中佐々成政攻め、小田原の北条攻めには、また信雄麾下の武将として参戦しま

す。小田原攻めるとき信雄は、伊豆葦山城攻撃を担当しました。このとき信雄は無能の責任をとわれて、秀吉のために不意に那須へ放逐される。主君が改易された尾張国は羽柴秀次の所領になって、雄善一家は伝来の所領地を召し上げられ在所に蟄居、困窮します。雄善の叔父前野長康が秀吉の重臣だったので嘆願、その口添えで、やっと所領の一部だけは返還された。その後、秀吉が朝鮮侵攻をくだると、秀吉から疎外されていた信雄は許されたが、元の主君という因縁でその信雄から、雄善は父雄吉とともに召集されて大坂へゆき、さらに九州肥前の名護屋まで出征してゆきます。叔父前野長康が豊臣秀次の事件にまきこまれて切腹すると、また身辺があやしくなり福島正則の力ぞえでやっと故郷へ帰ってくる。

やがて秀吉が死ぬと、徳川と豊臣が天下を分ける関ヶ原の合戦になる。ときに尾張の領主は福島正則なのですが、彼は家康麾下の武将として上杉氏攻撃のため関東へ赴いていて、雄善たちは、どちらにつくか、去就がきめられない。石田三成の指令をうけた密使から、雄善の所へ、豊臣方へつくべく誘いがかかる。織田信雄は豊臣方につくという噂が伝わってくる。雄善一家はさんざん困惑したあげく、尾張の人びとの大勢に随って、帰国した福島正則麾下に加わり、岐阜城(石田三成方についた信長の孫織田秀信がいた)攻め、さらに転戦して、関ヶ原へ向かい、ここで奮戦して負傷しそれ相応の手がらをたてて、やっと恵まれた晩年がおとずれるはずでした。だが雄善は、あくまで悲運の人でした。豊臣方が敗退し、家康の子徳川忠吉が入城した尾張清須城で僚友と口論、喧嘩両成敗というわけで、浪人の身となって前野村へ帰ったのです。

右に略記したプロセスの描写は詳細をきわめています。『武功夜話』の作者前野雄翟は、父雄善の折々の実状や彼をめぐむる状況を、彼自身の晩年と対照しながら、リアルに詳述してゆくのです。前野村の豪族だった前野雄善が、かくも苦難に耐えなければならなかったのは、彼の父十四

代当主雄吉もそうですが、単純に《勢家に媚び、利に奔る》ことのできない人だったからです。前野家の十五代当主たる雄善は、土豪としておのれの村落共同体をかかえ、行動を規制されがちでした。叔父の長康や勝長のように、自分の実力による奔放な活動がしにくい環境でした。二人の叔父も悲劇の終末を遂げるので一概に言えませんが、雄善の場合、秀吉・家康に比すれば、遙かに器の小さい織田信雄の麾下から、なかなか脱出できなかったのが不幸の原因であって、父のときから織田信長・信雄に従った織田家の恩誼に報じようとする保守的廉潔感がわざわざいたのです。

雄善は、戦陣にあつて何度も命びろいしました。以下に述べるのは、秀吉対信雄合戦における伊勢峰城の戦い的时候了。天正十二年（一五八四）三月、信雄配下にあつた雄善は父雄吉とともに北伊勢へ出陣しました。彼ら一行四二九人は、総大将佐久間正勝麾下に入り、総勢四六〇〇人余りの軍勢でした。そして秀吉方の大軍と対戦したのですが、皆さんの敗戦でした。いよいよ退却を決したとき、佐久間麾下の諸将が協議、最も危険な《殿軍》を申し出たのは、雄吉の知友関甚五兵衛でした。

《この時関甚五兵衛進み出で申しけるは、「今に至り大軍に向い一戦を始むるは無用なり。今朝よりの取合いにすでに味方の大半を失えり、御主（信雄）に面目なき儀に候も此処は一まず明退くにしかず。それがし殿（信雄）仕らんほどに早く退れよ」と申されける。甚五兵衛覚悟の心算に候、関甚五兵衛、孫九郎（雄吉）の旧功の人なり。年来の誼み深ければ「我等も共に冥土の御伴仕らん」と申されければ、甚五兵衛「おぼしめしは有難く存ずれども、御覧の如く寄手おびただしき人数、覚悟なくては切り抜け難し、御家存亡の時に候、佐久間殿と共に返し給

え」と、郎党ともに勇み立ち聞き入れざるなり。「しからば御辺殿陣致さば、それがしども先手を承り切つて出でん」、互いに今宵限りの命、永年の誼み忘れ難く候も、思い定めて引き退きける。峰の城、夜中忍び出で、上方勢（秀吉方）一柳市助、加藤作内、滝川将監の陣の真中を切り崩し駆け抜け浜手（伊勢湾の方向）へ向い候なり。この夜、満月中天に輝き渡り、寄手、城を明け退くを見て取り、八方より懸り合行路を塞ぎ、多人数をもって只一篇に討ち取らんと取り囲み、切り立てられ、見る見る討ち果され、必死に切り抜け候者僅に三十有余騎、辛くも浜手の浜田郷へたどり着き、浜田与右衛門掛け置き候番船にて海上、長島（伊勢、信雄居城）へ逃れ候なり。まことに九死に一生を得たる退き戦に候なり。》（卷十三）

さらに別の箇所では、《敵真近に迫り来たり陣形を立て直す間も相無く、助六尉（雄善）は親孫九郎（雄吉）と三十丁ばかり引き離れ候。舎弟孫八郎（雄長）、青木一郎兵衛、平井源太郎等十五、六騎ばかり、助六尉は馬を討ち捕られ徒立ちと相成り切り結び候、郎党の源太郎、与兵次相隨い候。この辺りは木立ち相無く身を隠すことも成らず……》（卷十二）と苦戦ぶりを記しています。関甚五兵衛は負けいくさの中で最も自己犠牲的な献策をしたのですが、このとき戦死します。雄善は自分たちだけ助かったことに、よほど負担を感じたのでしよう、『武功夜話』には、《関甚五殿、乱軍の間に討死、家人も大方討ち捕られ候、関甚五兵衛殿は尾州西郡の人、豪勇の人なり。倅関弥平次僅かに六騎と相成り石薬師に追いつき候なり。》（卷十二）、《関甚五兵衛、殿仕る乱軍の間に相果候。外聞面目これなき次第なり。》（卷十四）と、くりかえし記されています。雄善は「南窓庵記」に記録しただけでなく、後に作者雄翟に語りもしたので『武功夜話』は、この敗戦を、それぞれ三度にわたって叙述していません。

『武功夜話』は、前野雄善だけが主人公をなして単一に展開する作品ではありません。幾人ものヒーローになる人物が、輻輳並存しながら進行するので、雄善だけを作中からとりあげると、『武功夜話』がもつ構造上の魅力は半減するのですが、ここで私がくりかえし述べておきたいのは、作者雄翟が〈雄善の現在の時間と過去の時間〉を自由に往来する制作法をとつたため、〈作品を構成する時間〉——いわゆる人間的時間、が、奥行を増し、立体化するということです。京都の街を見渡すと、現代建築たるビルやテレビ塔とともに寺々や寺院の塔、檜皮ぶきの古代建築が聳えて、新旧並存する。私たちはそこに、歴史の重み、史的時間の重層化を感じることが出来る。都市の美観が重厚なものになるのです。パリや西安の魅力でもあるのです。シンガポールの街が、いかに近代建築と、舗装された見事な道路で、その美観をほころうとも、都市としての史的立体観に欠けるでしょう。例えば異質すぎるかもしれませんが、時間の重層化が感じられる点で似ています。

2

『武功夜話』が重厚感のあるリアリティーをもつ所以は、いろいろ考えられるのですが、制作の方法として、もう一つ考えるべきは、作者雄翟が十六世紀後半の様相をえがくにあたって、対象化する世界をきわめて意識的に限定したことです。彼はえがく世界を無理に広めようとしないう、認識し形象化する世界に厳重な限界をもうけているのです。どんな小説・物語でも、形象化に限界が設定してあるのは、制作の方法として当然のことですが、『武功夜話』の場合の〈形象化における限界設定〉は、特異な方法を内にもっています。

一五八二年(天正十年)六月二日、本能寺の変が起きた。いうまでもなく、明智光秀が謀叛を企て織田信長を本能寺に襲って、自害させた事

件です。この事件を正面から記述したのは『信長公記』です。

《六月朔日、夜に入り丹波国亀山にて惟任日向守(明智光秀)逆心を企て、明智左馬助・明智次右衛門・藤田伝五・斎藤内蔵佐、是等として談合を相究め、信長を討果し天下の主となるべき調儀を究め、亀山より中国へは三草越えを仕候。爰を引返し、東向きに馬の首を並べ、老の山へ上り、山崎より摂津国地を出勢すべきの旨、諸卒に申触れ、談合の者共に先手を申し付け、六月朔日夜に入り、老の山へ上り、右へ行く道は山崎天神馬場、摂津国皆道なり。左へ下れば京へ出る道なり。爰を左へ下り、桂川打越し、漸く夜も明方にまかりなり候。

既に信長公御座所本能寺取巻き、勢衆四方より乱れ入るなり。信長も御小姓衆も、当座の喧嘩を下々の者共仕出し候と思食され候の処、一向きはなく、ときの声を上げ、御殿へ鉄炮を打入れ候。是は謀叛歟、如何なる者の企ぞと御淀の処に、森乱申す様に、明智が者と見え申候と言上候へば、是非に及ばずと上意候。透をあらせず、御殿へ乗入り、面御堂の御番衆も御殿へ一手になられ候。》(巻十五)

かくして信長の少ない臣下たちが懸命に防戦しながら、次々に討死、そのあと信長の最期を記述し、信長の長男信忠の対応と奮戦討死へ記述をすすめています。《信長初めには御弓を取合ひ、二・三つ遊ばし候へば、何れも時刻到来候て、御弓の絃切れ、其後御鍵にて御戦ひなされ、御肘に鎧疵を被られ引退き、是迄御そばに女共付きそひて居り申候を、女はくるしからず、急ぎ罷出でよと仰せられ、追出させられ、既に御殿に火を懸け焼来り候。御姿を御見せ有間敷と思食され候歟、殿中奥深く入り給ひ、内よりも御南戸の口を引立て無情御腹めされ……》これが信長最期の全文です。『信長公記』の著者太田牛一は、まず明智方に視点をそそぎ、ついで織田方に視点をそそぎながら記述しています。彼の文章はつ

ねに、伝記作者らしいソツのない文体で、簡潔に書かれています。しかし事実の叙述をこえる迫力に欠けます。同時代に大村由己ゆいこという才人がいて秀吉のお伽衆をつとめ、「明智討」「柴田討」という能本まで書いて秀吉の事蹟を顕彰した人物ですが、彼も『惟任退治記』を書いています。「惟任」はむろん明智光秀のことです。この場合は、大村由己の学識が術学性をおびて、漢文調の文体で書かれているにもかかわらず、語彙が事件の深刻に滲透しえない弱点をもっています。

こういう本能寺事件の全的叙述に対して『武功夜話』の作者は、本能寺襲撃の現場をいっさい書いておりません。雄雀一族の人びとは、一人もこの場面に遭遇せず、いわば、彼らの認識の外で起きた事件だったのです。本能寺の事件のとき、織田信雄配下の前野雄吉・雄善父子は伊勢へ出陣していました。

《今度の異変、勢州表の様子、親亀齋（雄善）申し語り候事。一、この時、祖父孫九郎尉（雄吉）、並びに親助六尉（雄善）、一党衆は、勢州飯高郡松ヶ島城に罷り在り候由に候なり。御内府公（信長）本能寺において御自害、同日二条城中において、岐阜中将殿（信忠）御自害、何れも明智日向守逆心のため無念の御最期の注進、安土の在番蒲生右兵衛大夫（賢秀）より早馬にて、松ヶ島の信雄御元に伝え候なり。しかれば、中将卿（信雄）驚愕、不審々々、まこと大事の出来に付き、我が耳を疑い、且つは悲憤心頭に達し、落涙願うらみ欲して置く能わず候。安土右兵衛大夫よりの注進は、明智の軍勢安土に乱入の風聞これあり。至急身統みまの人数差し越しなざるべく申し越し候なり。安土御城下、此度の変事の次第伝り、町屋人、右往左往、止まる事を知らず騒然たれば、在番の人数手薄に付き心許なく、中将様御出馬を促し候。》（巻十）

これが前野本家の当主たちの帰属集団が知った本能寺の変です。松ヶ

島城は、今日の伊勢松坂にありました。父信長自害の注進に接した総大将信雄は、『陣触れ』をするのですが、やっと六月八日になって、信長の本拠だった安土へ出陣、《十一日辰の五ツ半の事、我等（雄善たち）安土の江の口岸より討入り候ところ、酉の四ツ刻、御城本丸より火揚り、御天守炎上候、ために術無く候》という次第、広大な城廓が火煙につつまれるのを、拱手傍観するばかりでした。信雄の反応が秀吉に比して鈍かったのは、じつはこの時だけでなく、彼の二流さは『武功夜話』中に、しばしば見られます。このことは同時に、前野本家当主たちの不幸でもありました。

前野家でも若年、非行性を帯びていた前野長康——雄吉の弟であり雄善の叔父であった長康は、青年期から豊臣秀吉と行をともした武将でした。秀吉が、木下藤吉郎といって信長配下の一介の武将だった時代から、すでに同志の家臣でした。本能寺の変のとき長康は、播磨国の三木城にいました。秀吉麾下の重臣として三木城主に任ぜられていたのです。彼の主君秀吉は、信長の指令で、備中高松城を攻撃の最中でした。

《天正壬午（一五八二年）六月二日、亥の刻四ツ半、この一点、天下の大事を知るなり。すなわち丹波表の長岡兵部（細川幽齋）殿よりの御使者到来、前将（前野将、右衛門長康）様、兵部大輔様よりの密書を見られ候いて、慄然として声なし。その場に居合せ候者、前野三太夫、石崎頼母、武藤惣左衛門、上坂勘解由左衛門、二宮右近大夫、前野清助門、丹波より夜中の御使者に候えば、上方において異変の出来、如何なる急変なるや一座罷り居り候衆、およそ計り難く前将様の顔色を窺い、暫時の間聞き糺す者として相無く候。前将様また無言蒼顔なり。ややあって氣息相調え、兵部少殿よりの一書の趣申し語られ候なり。「明智日向守逆心、洛中の御宿所本能寺に人数差し向け不意を討ち、御運拙く御最期の注進に候なり、」一座の者天下の大事、気転倒して徒

らに戸迷い、なす術を知らざるなり。思わず三太夫口早に謂曰く、「明智の大軍日を追って播州乱入は必定、これを支うるに相抱えの人数慮おもはんばかるに播州にこれなく候。筑前(秀吉)様は備中に罷り在り、姫路在番の人数と我等併せ一千に足らず、播州の進退、殿には如何に御思案候哉」と、膝乗り出し詰め寄り候。その場に御詰めの者、他に意見申す者これなく候。ただ魂魄を奪われ呆然、自おのれを失い様体浅間敷く候なり。この場において下知候事。

一、兵部少輔殿よりの注進、よもや相違ある間敷く候。明智日向殿へ同心これなきの覚悟明白、斯くなる上は徒らに逡巡して、天下後世のそしりを招く、これ武者の本意にあらざるなり。本能寺の出来、急度備中陣の筑前様に注進の事。一、直ちに処所に散在の者、とも呼び寄せ、陣用意申し付けるべき事。一、姫路御在番、真野右近(助宗)の元までこの旨至急注進の事。一、手利てきまの者撰えらび撰津表へ罷り立ち、諸將の動き細作候いて、上方の明智日向の進退見究めの事。但し上方撰津表通事の者。一、右の如く前將様御指図なされ、御具足を着用、御守備先罷り出で候者、明けて三日寅七ツ半の頃合いに候なり。素走りの前野九郎兵衛、古田吉左衛門、備中表へ罷り立ち候は卯六ツ刻に候。酉四ツ刻までには御馬場先に参集の人数、二百有余人急変出来に付き眠る事も能わず詰め居り候。一、大坂撰津表罷り立ち候者、上坂勘解由左衛門、児玉左衛門、小野木重之衛門、前野伝左衛門、田尻右近大夫、右の者ども首かしらにて十三人、身仕度相調え卯の下刻出で立ち候。》(巻十)

明智光秀謀叛の報に接した前野長康主従の描写は、緊迫感が満ちていて見事です。同時にわれわれは前野長康の対応の機敏さに注目すべきです。彼はただちに配下の全員に招集をかけています。姫路城へ至急の注進をおこなっています。そのころ姫路城は、秀吉の居城になっていました。いわでものことですが、安土城は近江にあり、それから西へ向かっ

て、山城(京)・撰津・播磨・備前・備中と続いています。明智光秀の居城は今の亀岡にあった亀山城でした。織田信長が近江安土城をあとにして、京都本能寺まで来たのは、秀吉が備中高松城の攻撃に難渋して、信長に救援を求めたからです。明智光秀の軍も、ほんとうは、秀吉のいる備中へ向かう指令を受けていました。三木城と姫路城は播磨にあって、前野長康は三木城で、真野助宗は姫路城で、それぞれ、秀吉出陣で留守になっている播磨国をかためていたのです。だから長康は姫路城へ連絡しているのです。同時に当然、備中の秀吉へも注進の使者をおくっています。

さらに一方、長康は東方撰津へ隠密をはなって撰津の現状を探索させています。明智光秀の動き、撰津に城をもつ武將たちの動向、明智方につきそうな武將の有無等をさぐるためです。だから撰津の事情に明る人物を間諜に選んでいます。このように前野長康の対応が詳細に分かるのは、彼の祐筆が記録を緻密におこなっていたからで、同時に拙論の冒頭で示した二人の人物、前野清助と前野九郎兵衛は、晩年『武功夜話』の作者雄智に、自分たちの体験を語っていたと思われまます。とくに前野清助は長康の股肱の家臣でした。

伊勢松ヶ島城にいた信雄の行動に比しても、前野長康の賢明敏速な対応は優れたものでした。秀吉と信雄とは、信長の配下、直属の大名です。二人のうち、どちらが、おのれの軍勢をひきいて明智軍と対決しても、おかしくはない兵力をもっています。前野長康は信長直属の武將ではなくて、秀吉配下の武將です。彼に明智軍と正面から戦う兵力があるはずもありませんが、秀吉の指令を仰ぐ以外、直接明智軍と対決することは、体制に反する行動です。つまり長康は、秀吉麾下の一武將として非のうちどころがない対応をしているのです。この長康らの配慮と行動に基づき、秀吉は急遽、備中高松城の攻撃を中止、講和を結び、信じられないほどの神速で、播磨を経て撰津に向かい、反明智勢力を組織して、山崎

において明智光秀を敗退させることになるのです。一方、信雄方でも、家臣たちは、光秀に対する直接攻撃を献言したにもかかわらず、信雄が聞き入れなかったことを非常に残念がっています。むろん、これらの詳細も根拠をもって『武功夜話』に叙述されています。すなわち『武功夜話』の作者は、自分の認識が的確に届くところ、事実が——できれば内情にいたるまで正確に捕捉できる範囲を厳密に限定して『武功夜話』の執筆に当たっているのです。換言すれば、本能寺の事件現場を叙述しなかったように、分らないこと、的確に認識できないことを、借り物の資料や想定で書くことは、しなかったのです。

3

このように『武功夜話』の作者は、正確な史実・事実認識のために、形象化の世界をきびしく限定しましたが、それだけでなく、前述のように、登場人物の存在にかかわる過去・現在の時間的な飛躍・往来をおこないました。この二つの制作方法を、当然のことですが、作者はしばしば併用しています。そのため、同じような内容のことを、二度・三度くりかえし書くことさえ起きています。

一五八四年（天正十二年）、羽柴秀吉方の勢力と織田信雄・徳川家康連合軍のあいだに、いわゆる「小牧・長久手戦」が起きました。両勢力のあいだには一進一退があったのですが、それはとにかく、以下に述べるのは、この合戦が一応終って、講和がむすばれた後のことです。合戦終結後の場へ登場してきたのが、時の越中領主佐々成政、およびその家臣前野勝長たちです。彼らは親信雄派で、戦争続行を主張する連中でした。佐々成政は、やはり『武功夜話』における重要な存在で、彼に関する記述はいたるところに見られます。この佐々成政一門に加わっていたのが前野勝長で、彼は前野本家十三代当主宗康の三男、十四代当主雄吉の

弟です。佐々成政一族がまとめて紹介されるのは、巻一においてです。

《佐々蔵人(成政)、この人、尾州春日部郡の井関という処に居城なり。長享(一四八七—一四八九)の江州陣以来なり。佐々党、本姓は江州余語の流れ、織田治郎左衛門敏定公の江州甲賀山の御陣所に駆け付け候衆なり。蔵人の世に至り、度重なる軍功あり。同郡比良なる処に領地を賜り、初め小田井藤左衛門尉の旗下なり。岩倉伊勢守(織田信安)、上四郡の小守護となるに及び、蔵助(成政)、隼人(政次)、孫助、岩倉付と相成るも、落去の後には上総介(織田信長)様付、当千の武者輩に候。舎兄(政次)、舎弟孫助、相ついで討死、蔵助は男子相なきにより、同郡岩崎郷、丹羽勘介の子、平左衛門を猶子となすなり。平左衛門の妹御は、当家(前野)小次郎尉宗康の三男小兵衛尉(勝長)の室なり。したがって小兵衛尉は佐々一門衆なり。》(巻一)

右の記述のうち、佐々成政を中心に少し説明すると、織田信長の尾張統一の初年、清須城の信長は岩倉城の織田信安・信賢父子と争い、岩倉方は敗北、滅亡した。それまで岩倉城付きだった佐々成政は、このときから信長の配下に入った、というのです。成政は三人兄弟だったが、二人は戦死、生き残った成政に子がなかったので養子平左衛門を迎えた。さらに平左衛門の妹(別の箇所では娘)の婿だった前野勝長を一門に迎えた。《内蔵助殿の断つての所望に付き》(巻四)と『武功夜話』は記しています。

佐々一門に関する『武功夜話』の、右の紹介は素っ気ないほど簡潔ですが、前野家との姻戚関係をふくめて、じつに要を得ています。信長の配下になった佐々一門は、多少の経緯がありました。信長の指揮下に鉄砲隊の精鋭として活躍、《武辺無双》の名をほしめました。そして幾多の艱難をのりこえ、佐々成政は、小牧・長久手戦が行なわれた

一五八四年のころ、北陸越中国の領主にまでのし上っていました。一五八二年信長自刃。そのあと、羽柴秀吉と明智光秀、秀吉と柴田勝家の対決があつて、ともに秀吉が勝利を収め、小牧・長久手戦で秀吉が、信長の二男信雄・徳川家康連合軍と対戦したとき、佐々成政は信雄・家康方に味方しました。しかし北国では、秀吉方についた加賀前田利家との合戦があつたり、藩内の事情があつたりで、尾張へ進攻することができませんでした。漸く前田と休戦の寸暇をえて尾張来訪のときは、すでに一五八四年十二月、佐々成政は、加賀国を通過している北陸道を通ることができず、敵寒深雪の立山を越えて信濃を経由し、遠江と尾張へ連絡にやつて来ました。冬の立山越えは困難をきわめたでしょう。今のうちに秀吉を抹殺しておかなければ千載の恨みを残すという、成政がいだいた将来展望の強烈な思いが偲ばれます。ところが成政が遠江および尾張を訪れたとき、小牧・長久手戦はすでに終り、講和が結ばれてしまつていました。信雄は秀吉方へ人質に自分の娘をおくり、家康は二男結城秀康をおくっていました。

遅れて連絡に来た佐々一行は、家康にとつても信雄にとつても、今や迷惑な存在でした。佐々一行はまず遠江浜松城に徳川家康を訪ねました。折から織田信雄も、小牧・長久手戦における家康の加勢に対して御礼を言うために、浜松来訪の途中でした。三者がかち合いそうになつたのです。信雄の一行には前野雄吉も加わっていました。佐々一行には前野勝長も加わっていました。さっき言つたように、雄吉と勝長は兄弟です。この二人の兄弟のあいだには、さらに前野長康があり、長康は羽柴秀吉の重臣でした。小牧・長久手戦のとき、幸い前野長康は尾張へ出馬しなかつたので、秀吉方の長康と信雄方の雄吉とは、兄弟対決の悲哀をなめないで済んだのですが、事は複雑でした。和平なつた今、佐々の家臣勝長は、秀吉と家康・信雄の講和に対する反対者の一員として登場してきてたのです。

浜松へゆく織田信雄に随行して前野雄吉が岡崎まで行った時のことです。徳川家康の臣僚松平家忠が、雄吉を訪ねてきました。

《去るほどに、それがし(雄吉) 岡崎へ到着候ところ、泊所へ夜中、松平主殿助(家忠) 様罷り越し御尋ねなされ、異外なる事申されけるなり。すなわち越中の佐々蔵助(成政) 此度の和議不服申し宣べ、馬乗二十有余騎、雪山万里の節所を越え、家康公に拜謁、言上申しけるは、「和議は一時の気やすめ、此のまま過ぎ候哉、筑前(秀吉) の狡猾に陥り、悔いを千載に残すなり。此の機を失わず、共に力を寄せ合ひ、東北方両道より兵を用いなば、四国・中国道・九州・紀州の諸將、相呼応して烟を揚げ、腹背に敵を請け進退極る處、それがしども北国道より江州へ乱入、筑前の背後を衝かば、勝利を得る事堅かるべし」と、風雪を凌ぎ罷り来たり候なり。聞き及ぶところ、貴辺は佐々内蔵助(成政) の類縁と承るなり。此度の佐々内蔵助殿扈從の内に、御貴殿の御舎弟前野小兵衛尉(勝長) 罷り在るなり。一行馬乗二十騎は、北国に名高き豪の者、佐々平左衛門・寺島甚助・佐々与左衛門・前野小兵衛・同又五郎(勝長男吉康) ・久世又助・神保越中等、当千の者どもに候なり。北国衆氣負い立ち、御主家康公の御出馬を願ひ出で候に付き、貴殿遠州へ越し候わば、迷惑を蒙るやも計り知れざるなり。又の舎弟但馬守(長康) 殿は、筑前御内譜代の宝臣なり。それがし密かに案ずるに、貴辺は中将卿(信雄) 御茶筌と申され、いまだ小さかりし頃より、軍忠二十歳の春秋を貫き、神妙なる働き、辛苦の数々、何人も能存ずる所、然りながら、毀誉褒貶は世の習い、如何なる事出来候哉、計り難し、今度は御無事成立ち、互いに家門長久、寔に結構なる事に御座候えば、一身をもつての進退、岡崎に相留り御遠慮あつて然るべきと存ずる次第、子細はそれがし(家忠) より三郎兵衛(信雄の家老滝川雄利) 殿に相計り、取り成し願うほどに分別成され、と懇切に申

しけるなり。孫九郎（雄吉）以為、嗟乎我が心中聊かもつて憚るところ相無し、さりながら、事に付き細心に在らせらるる御主、斯くの如き大事の刻、あらぬ疑いを受け、思いの外なる不覚を取るやも計り難し、懇切なる主殿助殿の御諭し、尤に候なりとて、沢井左衛門どの・久三郎殿に内々に此の由なるを申し含め、持病の発作これあるに付き、歩行不自由、寔に恐れ多き次第、この場にて休息の儀願ひ奉り候ところ、御承知下され、病の差し置き困苦の段大儀なりとて、能々御見舞に越しなされ忝き次第、私儀のため殿（信雄）を偽り仮病を拵え不忠、面も向けられず候なり。孫九郎（雄吉）心中呵責候も、天下無事に治り候今において、兄弟の情、壻をもつて塞ぐなり。次の日、中将（信雄）様御一行、遠州を差して急ぎ給う。その日は岡崎に止宿、懇切なる御取り計らい、主殿助（松平家忠）殿へ重々御礼申し上げ、在所（前野村）へ罷り帰り候なり。》（巻十四）

前野雄吉は前野村の自邸へ帰っても、思いは千々でした。彼はこんどの講和をやむをえぬなりゆきと思っています。しかし《越・信の峻山白雪を払って隠密に》やってきた佐々成政のこと、仮病を構えて弟に逢うことを避けた所行、事の実体が発覚して主君信雄から受けるかもしれない勘気、いろいろ思いやると不安や心配がこみあげてきたのです。やがて信雄が清須城へ帰ったことを知ると雄吉は、早速伺候します。そして浜松へ同行した家老の滝川雄利から事情を聞いてまず、ほっとします。滝川雄利が言うには、家康は《密々の取り計らい》をもって、織田信雄を佐々成政に会わせなかつた、というのです。家康は老獺でした。滝川雄利はさらに言います。家康は佐々成政に対して《路次の辛苦御勞なされ、御一行随従の者まで、下にも置かぬ御饗応なされ、「尾州上下、此度無事の計らい、鼓腹して和氣山谷に満ち、喜悅の様体に候なり。治に乱を招くの愚は、天下万民の信を失い、亡国を作す業なり」と実心をもつ

て御諭しなされ、重々御自重あつて然るべきと》説得した。豪気の成政も、やむなく時節を慨嘆しながら、越中へ帰っていった、というのです。こういう場合、注意すべきは、へそでは佐々成政はその後どうしたか、ということに、佐々成政側へ視点を移して叙述することが決してない、ということでは、前野雄吉は安堵して前野村へ帰りました。しかし事は、それだけで決着はしませんでした。『武功夜話』は、前野雄吉側に視点を置いたまま次のように記します。

《天正甲申（一九八四年）趨晦日、西六ツ半刻、御舎弟前野小兵衛（勝長）、佐々平左衛門、従者三人、当屋敷（雄吉邸）に罷り越し候なり。熊の毛皮の胴着、同半袴、四尺に余る野太刀を負い、頭巾の出で立ち、髯面の中に眼光突々、長途憔悴して、相貌極めがたし。一、前野小兵衛勝長、孫九郎尉（雄吉）の末弟なり。加賀守と作る人、度々軍功を重ね、佐々内蔵助（成政）の老職なり。越中国利波城主、一万五千石を賜るなり、時に小兵衛五十一歳、嫡子又五郎吉康を同道、ともに北国に武辺の名聞え高き人なり。小兵衛尉女房は佐々平左衛門の妹なり。》（巻十四）

前野家には別の記録もあつたらしく、巻十五の記載では、来訪者の中に、他に桜木甚左衛門・前野嘉兵衛らが加わっていて、合計八名になっています。巻十四に比して、三名多いのです。『武功夜話』の、その後の記事を見ると、八名説の方が史実だつたと思います。佐々一行は家康に会つたあと、越中へ帰つたわけではなく、佐々成政に同行の前野勝長たちは、兄雄吉の実家を直接訪れてきました。しかも勝長たちが語るところによると、主君成政は、清須城の信雄のもとへ乗り込んでいったというのです。むろん《和議の条々を反古に致し、再度兵馬を催し、羽柴筑前討たずんば、いよいよ増長して君臣の義は廃れ》すべての武将が秀吉の

前に馬をつなぐ辱めをうけるにちがいないから、今のうちに合力して秀吉を討とうという説得のためです。表現はとにかく、その主張は家康に對したときと同じですが、家康と對談した結果は、滝川雄利の言うところと相違がありました。

勝長たちの言う家康の意見は次のようです。へ自分は織田信雄の意志にまかせている、尾張からわが軍を撤退したのも、信雄の御意志に従った、家中の者は我慢できず不服に思つて承知しなかつたが、せつかく信雄卿が和平交渉に奔走しているのに違背しては、織田家に対する粉骨の忠義も、結局、不義になってしまう。このあたりの儀を御明察ねがいたい、だからといって、われわれは秀吉の勢力に屈したわけではない、紀州の雜賀・根来衆、四国の長曾我部は、自分に内通してきている、秀吉は、先君信長公恩顧の者をしてなすけ、主家たる織田家に対し、あるか無きかの振舞いをしていて許しがたい、来春を待つて決戦に及ぼう」と言つた。そのうえ、へ北越はいま深雪で、軍勢を動かしがたい、加賀の前田利家に備えて国境をかためることが肝要だ」と忠告までしてくれて、《義は泰山より重きと心得候》と言つたので、家康の忠義の心に感じ入つた、とまで言うのです。滝川雄利が語つた会話の内容に比して、家康の、佐々一行に對する応接は、無双無類の老獪さです。

後に勝長の甥で十五代当主雄善が、嫡子である『武功夜話』の筆者に語つたところでは、父雄吉の沈痛は、雄善も見かねるものでした。雄吉は、松平家忠が内密に教えてくれたので、家康がわが子を人質に秀吉のもとへおこつたらうえは、家康に秀吉方と決戦の意志がないことを充分知っています。雄吉は《信雄卿は姫を上方(秀吉のところ)へ差し出したのだ、実は自分の子息雄長が付き添つていった》と言つて、講和破棄のむりなことを話しますが、家康・信雄が秀吉勢と敵対しなければ、越中の領主佐々成政が、秀吉の前に孤立無援の存在になることは、だれの眼にも明らかです。勝長も佐々平左衛門も、自分たちの、いろいろの努力

と主張を必死にくりかえすのでした。『武功夜話』の筆者前野雄翟は、緻密に《事実》に執着する人でした。《遠州浜松御城徳川殿との御就談の趣》、《前野小兵衛、佐々平左衛門の顛末》ともに、家伝記、喜左衛門日記によると、父雄善が語つたところと《多少の相違》があるから、それをそのまま誌して置く、と言つて、十二月末日、前野勝長たちの到着時刻の違いをはじめ、同事件に関する別の記述をしています。

雄吉は、自分が浜松へ行く途中仮病で帰つたことは勿論、他にも弟勝長に秘した事々があつたように思われます。松平家忠が語つたところでは、秀吉方から浜松城の家康のもとへ講和の件で来た使者に富田一白がいました。彼は雄吉の弟前野長康配下の人物でした。それで家康の子秀康を秀吉のもとへおくるについて、この前野長康の配慮をくれぐれも依頼したというのです。今度の講和を秀吉に献言し、織田家との関係を《幾久しくあるよう》、秀康を《猶子》として迎えるべく講じたのも、前野長康と秀吉の異母弟秀長だということです。くりかえしますが、前野長康は勝長の兄です。こういった類のことを雄吉は耳に入れていながら、勝長に語つたようにみえません。また、雄吉は、織田信雄の《御姫御様》が秀吉のところへ人質として行くに當つて、扈從役を命ぜられた二男雄長のことが心配で、長康に一書を送り、よきはからいを依頼しています。雄吉・勝長兄弟は久しぶりに顔を合わせたにもかかわらず、兩人の情況は心ならずも、きびしく対立しています。

4

佐々成政の、織田信雄に對する説得に、むろん信雄は応じませんでした。小牧・長久手戦が激化する直前、信雄は成政に、隱密の使者をおくつていた様子です。味方になって尽力してほしいという依頼をしたのです。それにもかかわらず今は、冷たいしうちです。家康より叡智も思慮

も、はるかに劣る信雄の拒絶は、佐々一行を憤怒と絶望に追い込むものだったにちがひありませんが、『武功夜話』の筆者は、成政と信雄が直接会談する場面を想像力で書くことは、けっしてしません。作者が認識することのできた圏外だからです。信雄が成政の意見を聞き入れないことは、たまたま訪れた佐々一行中の一人、三田村孫右衛門が雄吉邸へ連絡に来て、信雄が言語を左右にして不承知の様子を語ったり、やはり佐々一行の一人で雄吉邸に宿泊していた桜木甚左衛門が《まことに不甲斐なき清須衆の優柔、筑前守（秀吉）の意を迎ゆるに汲々たるをのしり、かくの如き腰抜けども最早、清須を保ち得ずと嘆き、眠ること能わざるなり》と、その時の様子を見聞していた前野喜左衛門が日記に記載しておいたからです。

佐々一行中の八人は前野雄吉の家に泊って織田信雄を説得する成政からの連絡を待った。その間、雄吉・勝長兄弟は時勢を論じあった。雄吉は戦争続行の不可能を説いた。《小兵衛どの、黙然、心中覚悟の様躰に候》と記しています。信雄との交渉は不首尾のまま《当家に相留る事両五日》、努力は報いられることなく去っていった。一五八五年正月初頭のことです。また佐々一行は氷雪の立山を越えねばならない。勝長は末子嘉兵衛を前野家に託してゆきました。嘉兵衛はまだ十五歳、若年で同行の郎党に迷惑がかかるから、というのですが、悲運の終末が予想される佐々党に、この少年をまきぞえにすることは、忍びなかつたのでしょう。尾張を去った佐々一行が、その後、どのような苦難に耐えながら冬の立山を越えて越中富山へ帰ったか、また春とともに、すぐ予想される秀吉の越中攻撃に対して、佐々成政をはじめ重臣以下、どのような防衛態勢をしたか、秀吉方との合戦に越中勢がどのように奮戦したか、というような具体的事態は描かれませんが、佐々一門の側からの内情描写はないのです。それは再三述べるように『武功夜話』の作者が認識しうる資料不在の世界だったので。

もともと『武功夜話』には、北国における越中佐々と加賀前田の対立事情について、あれこれ書かれています。でもこれは、前野家を訪れた時の勝長の話やあとに留まった嘉兵衛の話と、翌年予期されたとおり、秀吉方の軍勢が越中を攻撃したとき出征した前野雄吉・雄善父子が、加賀の前田利家から聞いて、のちに雄善が記載した情報によるものです。越中と尾張と、今でいえば富山県と愛知県西部とは、分りきったことですが、遠く離れています。佐々方も前田方も《細作》をはなつて情報を得ていたのですが、前野村へ来たときの前野勝長の証言によると、信雄方について佐々一行には、尾張へ出発前、小牧・長久手戦の戦況認識に誤りがあったらしく思われます。すなわち、信雄・家康方の緒戦における勝利を聞いて、その後もその有利を臆測していたらしく、実態として、尾張国の半分が秀吉方の大軍に蹂躪されていたとか、合戦のために尾張国が疲弊して戦争続行が不能に陥っているとかいう実情を知らなかつた、と言っています。少なくとも前野勝長は故郷を去るときすでに、自分たちの孤立とおのれの死を充分覚悟してしまっていたと思われれます。

それに対して加賀、今の石川県に拠点をおいていた前田利家方では、秀吉勢は羽黒や長久手で敗北したものの、全体の趨勢として、秀吉が天下の大勢を制しつつあることを承知していた。信雄軍に組織されて越中攻撃に参戦した前野雄吉・雄善父子は、前田利家からも、佐々と前田——ともに尾張出身かつ旧知の両家が対立するにいたつた原因を聞いています。むろん前野勝長から前野の実家で聞いた対立の原因と相違しています。互いに佐々方は佐々方で、前田方は前田方で、おのれの正当性を主張しています。『武功夜話』の筆者雄翟は、証言者を明示しながら両者の相違を丹念に記述しています。しかしそれに関する自己の安易な判断を書きません。彼は認識しえた情報の正確な理解とその記述に徹しているのです。こういう彼の制作態度は、この事件に関するだけでなく、『武

功夜話』全篇を通じて、不変の方法です。

一五八五年(天正十三年)八月、秀吉の大軍が越中を攻撃するに当り、秀吉と講和を結んで間もない織田信雄は先陣を命ぜられ、前野雄吉・雄善も、その麾下に組織されて従軍します。先陣に織田信雄を使用するところには、秀吉の小牧・長久手戦における報復および信雄と佐々の間を裂く政略が感じられます。《乙酉(天正十三年)八月、越中佐々党、加州へ乱入に付き、佐々御退治のため、北畠中将卿(信雄)越中の御先陣を仰せ付けられ候。此度の越中出勢は本役に付き、尾張勢の惣勢子、一万二千有余の人数、越中に差し向け候なり。孫九郎尉(雄吉)・それがし(雄善)共に御供仕る》とあって、前野村から動員した人数も細かに記録されています。雄吉はとうとう、弟勝長と第一線で敵対することになったのです。これはやはり相当心の痛むことだったのでしよう、越中安養坊の陣中で、勝長討死の報に接し、《前世の因縁なる哉》と嘆息しています。雄吉父子よりも、もっと悲嘆にくれたのは、前野村に残った勝長の子嘉兵衛でした。

《羽柴筑前公(秀吉)大軍を催し、越中の佐々を征せらるるの時、北畠中将(信雄)卿は、越中の先陣を仰せ付けられ発行、越中国安養坊に陣所を構え、同国新川郡へ討ち入り候の時、陣中において、御舎弟小兵衛殿(勝長)、討死の注進を相聞くなり。右は親亀斎(雄善)も同陣、帰陣の後、その由、嘉兵衛に申し聞せ候ところ、嘉兵衛儀、悲嘆限り無く候。落涙の果て申しけるに、「我志を屈し、相留り候は、不幸の第一なり、忠義も尽さず、空しく留り候の不覚、面目なき次第、此度の、我を残し置かるるは無念なり。…》(巻十五)

嘉兵衛は、もし佐々成政や兄前野吉康がまだ存命ならば、今から出征して自分も戦い、忠誠を尽くしたいと、伯父雄吉に頼むのですが、雄吉

は許しませんでした。

越中の合戦は佐々党の敗北に終り、佐々成政は降伏するのですが、成政自身の降伏場面描写はありません。佐々成政に関する記載は、その後いきなり、一五八八年(天正十六年)四月八日、摂津尼ヶ崎で秀吉に逢うことを許されぬまま、切腹を命ぜられる場面へ飛躍しています。秀吉にくだった佐々成政は、秀吉の九州島津攻撃のとき従軍して功をたて、肥後国を拜領するのですが、秀吉から命ぜられた検地の最中、土民の一揆がおき、失政の責任をとわれたことになっています。しかしこれは、かつて秀吉の同輩だった成政を抹殺する口実だったと思います。この消息を作者が『武功夜話』に記述しえたのは、前野勝長の孫伝左衛門が前野長康の家来前野清助に語り、この清助が、拙論の冒頭で述べたように、『武功夜話』の作者たちに語ったものと思われれます。

ここで重複を厭わず述べておきたいのは、『武功夜話』における(時間的表現)についてです。前野勝長の子息嘉兵衛や前田利家たちについて、右に述べた記述は、だいたい事件が起きた年月、事態に遭遇した時点を中心に書かれています。『武功夜話』の著者は、誤解をおそれずにいえば、それらの事件・事態を、起きた(当時)に主体において書いています。ところが前述したように、『武功夜話』の著者は(それより以前の過去)も(それより以後)の執筆時点たる現在も、自由に往来する制作方法をとっています。いわば(大過去)も(過去)も(現在)も、飛躍をかまわず作者の胸中を自在に往来するのです。

前野嘉兵衛に関する次の記載は、『武功夜話』執筆時における嘉兵衛について記しています。(父勝長の討死を聞いて涕泣した嘉兵衛)よりもずっと後、何十年か後の嘉兵衛、年老いて死んだ嘉兵衛に関して記して、それが同じ巻十五に載せられています。

《当家（前野家）裏屋敷の小二郎丸に住居する嘉兵衛は今人なり、嘉兵衛の親の嘉兵衛の事なり。……前野嘉兵衛は、のち吉田と改む、孫九郎尉（雄吉）養うなり。一、前野小兵衛尉（勝長）供養塔一基、これは嘉兵衛の建立に候なり。この武功記を作書の時、嘉兵衛存命なり。喜左衛門の^{せがれ}助清と共に筆を把るなり。》（巻十五）

これは徳川時代の寛永（一六二八—一六四四）年間、『武功夜話』執筆時ころのことで、《有為転変は世の習いなる哉、佐々党亡して五十有余年、寛永の今の世に、諸々の人、甘夢を貪るの時、秋霜の義氣、翻雲覆雨の^{ごり}誘を招くなり、書記するも意乱れて此くの如く候なり》（巻十五）と南窓庵記に書いた時と同質の、嘉兵衛回顧なのです。

また前田利家に関しては、越中合戦のうち佐々との不和について利家の陳述を記した直後、同じ巻十五の中で突如次のように書いています。

《一、越中の佐々蔵助（成政）、加州の前田又左衛門（利家）、何れも尾張出の者、この兩人は、羽柴筑前守（秀吉）いまだ草莽の間、尾州上郡浪々の頃より、昵懇を暖め、互いに相見知りの人々に候なり。殊に前田又左衛門、信長公の勘気蒙り、清須を退去、諸国流牢の時、比良の佐々蔵助所に寓居候事あり。……（南窓庵記）》（巻十五）

そしてそのあと、当面する別の話題が展開するのですが、また連想が前田利家に及んで、次のように記述してあります。

《一、加州の前田又左衛門と言うのは、後の大老職、加賀大納言利家公の事。利家公いまだ若年の頃、亡き信長公の御勘気を蒙り、諸国流牢の時、尾州春日部比良の佐々屋敷に寓居ある由。天正西歳（十三年）大軍をもって越中の佐々退治の折、又左衛門尉、筑前公に取り成し一

方ならず、まことに信義厚き御仁なり。後年、前野但馬守（長康）伏見城中において関白秀次公、行跡不行き届きの冤罪^{えんざい}の御咎めこれある時、諸侯の内、又左衛門殿只一人、理非を弁じ御取り成しこれある由。》（巻十五）

こうして『武功夜話』の作者は、当面する事態をめぐって《過去》と《その後》を飛躍して往来するために、また史実の過度な探求のために、しばしば記事の重複さえひきおこすのですが、この重複は制作方法、もたらす目的必然であって、『武功夜話』が作品の立体化、重厚化を獲得した所以でもあるのです。

『武功夜話』は基本的には年代順に書いていった戦記文学です。しかし年代順に書いてゆきながら、状況に対する証人の陳述に内容の相違があると、同じ事態について併記する必要が生じたり、それにかかわった人物の過去やその後の生涯に連想が及ぶと、平気でそれを繰り返したり、資料不足から《認識の限界》を越えてしまうと、平然と省略飛躍したり、結局、年代記はゆきつ戻りつ、悠々たる大河の流れを思わせる作品になっています。作者には、書かずにいられない情熱がただよっているにもかかわらず、です。それは、せっかちな読者には読み通せないほど、悠揚たる展開に思われます。

そしてそこには期せずして、廉直正義の士よりも、時流に敏感かつ機敏な人、他人を犠牲にして顧みない人、利にさとしい人、権力の座を占めるためにあらん限りの工夫と努力を重ねる人、人心収攬のために無双の知恵を発揮する人、権力を握ると横暴になる人、等々——あるいは、これこそ人間の原質であり本質であるかもしれない人物たちも、作中でリアリティーをもって跋扈する作品たりえたのです。作者自身は、たぶん廉直の人であったにもかかわらず、です。